不気味な魔物の影

――戦争下の『右大臣実朝』――

北川　透

太宰治の『右大臣実朝』（錦城出版社）は、昭和十八年九月に刊行された。これが最初に着想された時点は、昭和十一年頃まで遡ることができるにせよ、実際に書かれたのは、〈大東亜戦争〉下の昭和十七年末から翌年の春にかけてであった、という決定的な意味を無視して論ずることはできないだろう。太宰の戦争の意味は、北条氏の武家政権を合理化するために書かれた歴史書『吾妻鏡』の編年体の記述を、随所に引用という形で示しながら、それを小説的に脚色する方法のなかに折り込まれている。

よく比較される小林秀雄の「実朝」も、昭和十八年に書かれている。ついでに言えば、斎藤茂吉もこの年に一冊の分厚い『源実朝』を上梓している。もっともここに収められている論文のほとんどは、昭和初年代に書かれたものであり、太宰や小林のそれのように、この時期のものではない。ただ、これらを見ると、〈大東亜戦争〉の最中、実朝はちょっとしたブームの観を呈していた、とも言えなくはない。そこには龍粛訳註『吾妻鏡』が、岩波文庫版で刊行されていたことも関係しているだろう。[注1]

小林の「実朝」も、『吾妻鏡』における〈実朝横死事件〉の記述を引用することから始めている。小林が作り上げた実朝像とは、陰謀と暗殺に明け暮れる百鬼夜行の鎌倉武家集団の上に乗り、若い時から殺されるべき自己の運命を知り、しかもどうすることもできなかった《暗い、鋭い、孤独な詩魂》というところにあった。そこにやはり、当時、暗い孤独な詩心を内部に封じこめて、死ぬようにしか生きられなかった、小林にとっての戦争の意味も投影されているが、しかし、これは小説ではない。批評家の古典詩人論である。この性格の違いを踏まえた上でないと、両者の比較はできないだろう。

では、『右大臣実朝』が〈大東亜戦争〉下に書かれた、とはどういうことか。その一端は、津島美知子の次の証言からも知ることができる。

> この頃、戦局が次第に進展して、言論出版が、喧しくなつてきてゐましたから、「御所」がいけないといふので、「御ところ」とわざわざ書き直したり、南面といふ言葉で心配したり、いろいろ苦心があつたやうです。そのうへ、「十五年間」といふ短篇にも書いてゐますやうに、「太宰はユダヤジン実朝を書いて、情報局

からにらまれてゐる」といつた、今では、ばかばかしくて信じられないやうなデマがとんで、私達は、どんなに憤慨したことでせう。十七年の十月に発表した「花火」は全文削除になるやら、この頃は全くひどいことばかりでした。

（「実朝のころ」）[注2]

『吾妻鏡』では将軍家の御座所にも〈御所〉や〈南面〉を使っている。しかし、もともと〈御所〉も〈南面〉も天皇の御座所や帝位に関することばであれば、戦争下の言論統制のなかで、そのままこれらを踏襲できるかどうか、〈京都御所〉〈仙洞御所〉と〈御ところ〉を区別したり、〈南側〉としたり、扱い方に苦心した跡が見える。それはそのまま、実朝と朝廷との関係の把握にも及んでいく問題なのである。実朝の生涯を描いて、彼の鎌倉部門勢力に対する存在理由である、その朝廷への忠誠心をカットするわけにはいかない。実朝の《山は裂け海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも》の、歌が孕む問題については後述するが、これについて斎藤茂吉が昭和十七年に書いた「『二心わがあらめやも』に就いて」という論文[注3]が、当時の雰囲気を伝えている。すなわち当時、ある学者が《二心あらめやも》について、《真の忠誠者には第一『二心』といふごとき観念の浮んで来る筈はない》という疑義を出した、というのである。

これらは、実朝の朝廷に対する態度をどう描くかで、つまり、〈右大臣（ユダヤジン）〉実朝風に描けば、身に危険が及ぶことになるし、翼賛小説風にやれば文学の自殺行為にもなりかねない、ということを示している。作者が直接語るのではなく、それとの距離をもった別の語り手の設定は、この作者の危機と作品のそれを共に乗り越える意図を秘めていたはずである。一年後、やはり、ある意味でとても危険な人物である魯迅を描いた『惜別』においても、その重要な仕掛けは語り手の発明にあった。[注4]

短篇「鉄面皮」は、『右大臣実朝』より数か月先立って、それの執筆自体をモティーフにした、予告編とも解説とも言える小説である。ここで初めに書いた、実朝論の着想が昭和十一年の入院時だったことが明かされている。それはともかく、まだ、小説が出来ないうちに、その創作苦心談を発表するという鉄面皮は、子供の頃、赤鬼の面をかぶった気持ちに似ているとして、《鉄面皮。このお面をかぶつたら大丈夫、もう、こはいものはない。》と書いている。語り手の仮構も、作者にとってはひとつの仮面をつける行為だろう。太宰は戦争下を作家として生き抜くために、鉄面皮というお面をかぶろうとしたのではないか。《もう、こはいものはない》その面をかぶることにおいてこそ、彼は当時のどの文学者よりも自由になれたはずである。

とりあえず、そう仮定するとして、『右大臣実朝』では、どんな語り手〈私〉が登場しているだろうか。それは実朝十七歳の時に、お傍のご用を勤めるために上がったとされる近習である。その時、近習の〈私〉は十二歳であるが、これを語っているのは、実朝が亡くなってから、出家して山奥に隠れ住んだ二十年後である。つまり、十二歳から二十二歳までの〈私〉が、約十年間にわたって、実朝の近習という立場で見聞したことを、四十二歳になってから追憶して語っていることになる。もう今の〈私〉には、鎌倉での生活は《淡

い影のやうに思はれ》るが、《ただお一人、さきの将軍家右大臣さまの事を思ふ》と、胸が潰れ、念仏どころではなくなる、と言っている。

これは実に巧みな設定と言わざるをえない。なぜなら、近習という立場は、実朝にもっとも近いというだけでなく、鎌倉幕府の権力の中枢という位相から、すべての政治的な動きを見渡すことが出来るそれだからである。しかも、十二歳の無私の眼は、《私には神さまみたいに尊く有難く》《私たちとは天地の違ひ》があるという、実朝の貴種性への絶対的な憧れ、信仰による幼い眼鏡を可能にした。語り手はそれを保存し追憶しているだけではない。同時に二十年から三十年以上後の、隠遁者という立場で獲得した、全体を見渡す円熟した眼によって、その幼い視力を修正し、補強しているのである。そのことはすでに実朝が疱瘡を病んで回復した直後に、尼御台が見舞いに訪れる、冒頭の場面によく現われている。

私もその時、御寝所の片隅に小さく控へて居りましたが、尼御台さまは将軍家のお枕元にずつとゐざり寄られて、つくづくとあのお方のお顔を見つめて、もとのお顔を、もういちど見たいの、とまるでお天気の事でも言ふやうな平然たる御口調ではつきりおつしやいましたので私は子供心にも、どきんとしてゐたたまらない気持が致しました。……中略……あの方のお顔には疱瘡の跡が残つて、ひどいお面変りがしてゐたのでございます。お傍のお方たちは、みんなその事には気付かぬ振りをしてゐたのですが、尼御台さまは、そのとき平気で言ひ出されましたので、私たちは色を失ひ生きた心地も無かつたのでございます。その時あの方は、幽かにうなづき、それから白いお歯をちらと覗かせて笑ひながら申されました。

スグ馴レルモノデス

もとよりこれは《子供心》の〈私〉の眼に映った光景であるが、それはまた三十年後の時間の遠近法によって、見事に意味づけられたものでもある。そうでなければ、この三つの緊張した視線の交錯が捉えられるわけがない。〈私〉やそばの者たちの視線は、疱瘡で実朝の《お面変り》がしていても、《その為にかへってお顔が美しくなる事こそあれ、醜くなるなどといふ事は絶対に無い》という、いわば信仰が作り出す虚構のなかにある。しかし、尼御台は母であると同時に、北条義時と政治的には共同する、権力者の冷厳な視線をもっている。だからこそ、将軍家の醜い顔のあるがままを直視することが出来る。

そして、実朝はその冷徹な視線のすべてを、《笑ひながら》飲み込む、つまり、《融通無碍》《和気靄々》《天真爛漫》《天衣無縫》《無邪気の霊感》によって無化する透明な〈白痴〉のような存在として語られる。そうでなければ、征夷大将軍とはいいながら、鎌倉武士団の宗教的な権威ではあっても、政治的には傀儡でしかない場に座っていることは出来ないのである。実朝に対する絶対的な信が生み出す、フィクションのなかにいる幼い眼と、すべてを見通す円熟した眼の間を、自由に往還するこの語り手〈私〉の自在な位相こそは、鎌倉幕府の内部の血なまぐさい武家集団同士の権力闘争、そ

れと実朝を利用しようとする京都の朝廷、それらの危うい均衡の上に乗っかっている将軍という、権力のゲームを捉えるための装置であり、これなくしてこの小説は成り立たなかった。

小説における語り手のこの特異な位相を捉えないと、たとえば吉本隆明のたいへん影響力をもった[注5]、次のような読み方が受け入れられてしまう。

太宰の『右大臣実朝』は、ひとくちにいえば太宰の中期における理想の人物像を実朝に托したものといっていい。「駈け込み訴え」には[ママ]はっきりと描かれているように、太宰の中期の理想像はキリスト・イエスであった。そして実朝にはキリスト・イエスにあたえた人物像をほとんどそのまま再現したといってよかった。聡明で、なにもかも心得ていながら口にださず、おっとりかまえているといった人物像は安定期の太宰のあこがれた理想像であった。[注6]

（『源実朝』〈I〉）

かつてわたしもそう読んで、こうした見方を疑うことはなかった。「駈込み訴へ」の語り手がユダであり、『右大臣実朝』の語り手が実朝の近習であることを捨象すれば、この見方が成り立たないことはない。ただ、ユダにとってイエスは、単に理想像ではない。汚れた手を他者に転化し、みずからは無垢を体現する作品中のイエスは、ユダにとって近親憎悪の対象である。太宰にとっても、イエスは理想像というわけではない。彼がユダを語り手として、イエスとの関係を描くことで象徴させたかったのは、信仰が裏切りを必ず派生させるという内心のドラマだった。それは太宰自身の左翼体験に遡る、暗い無意識のなかで疼く傷に基づいている。

そして、『右大臣実朝』において、実朝を理想像としているのは、太宰ではなく語り手の近習である。ここでのユダは公暁禅師のように見える。しかし、公暁には実朝へのどんな信仰もない。少なくとも小説のなかで、彼が実朝を暗殺するのは、実朝を頂点にし、北条義時と阿闍梨公暁のそれぞれを三角形の底辺の両極とする、政治の力学の内部の役割を引き受けたからであって、個人的な恨みや僻みですらないように語られている。だから、一見そのように見えても、実朝が救い主イエスでないように、親の仇を討つ公暁はユダではない。奥野健男以来のキリスト＝実朝、ユダ＝公暁とみるなかば定説化した図式は、作品を直に見る眼を奪ってきたのではないか。ここでの語り手は、実朝を極端に聖化し理想化する。しかし、それは実朝を北条義時、その他の武家勢力、公暁、朝廷などの陰惨なパワー・ゲームのなかで無力化し、空虚な中心にするためである。一方、公暁みずからに軽薄で卑しい〈山師〉としての自分を語らせる。その公暁のうちに、自分を含んだこれらのすべてを否定し、不信を生きるニヒリストの姿が見い出されている。

しかし、この小説で公暁が一つの極としての意味をあらしてくるのは、終盤になってからである。それまでは実朝と北条義時の関係が軸になって展開するが、両者の間にはどんな陰謀も反目もなかったというのが、『吾妻鏡』の立場である。この小説の語り手も、その『吾妻鏡』の立場を踏襲するように、両者の間に非和解的な対立がないことを強調する。たとえば《下々の口さがない人たちは、やれ尼御台が専横の、執権相模守義時が陰険のと騒ぎ立ててゐた事も

あつたやうでございますが、私たちの見たところでは、尼御台さまも相州さまも、それこそ竹を割つたやうなさつぱりした御気性のお方でした。《貴い、謂はば霊感に満ちた将軍家と、あのさつぱりした御気性の上に思慮分別も充分の相州さまとの間に、まさか愚かな対立など起る道理はございませぬ。》というように語られる。ここでは尼御台政子も相州義時も、政敵に対する情け容赦のない苛酷な振る舞いにもかかわらず、それに相応した残忍な性状の持ち主のように現われてはいない。特に義時は合理的な考えと常識をわきまえた、職務に忠実で有能なテクノクラートとしての姿を見せている。彼は終始、将軍家に対する忠誠心を失うことがない。

しかし、太宰は近習の〈私〉が語る、この義時の実直でさっぱりした素顔のなかにこそ、むしろ、暗く陰険な権力の本質を見ているのではないか。なぜなら、義時の実直さのなかに、《コツンと固い几帳面なところ》があり、《むだな事は大のおきらひ、隅々までお目がとどいて》窮屈であり、そして、そこに《どこやら、ちらと、なんとも言へぬ下品な匂ひ》がする。その《匂ひ》こそが、目的のためには手段を選ばない政治の悪臭なのである。〈私〉は《そのなんだかいやな悪臭が少しづつ陰気な影を生じて来て、後年のいろいろの悲惨の基になつたやうな気も致します》と語らざるを得ない。〈私〉は義時のこのぞっとするような《下品な、いやな匂ひ》に何度も言及する。また、父時政と義母牧の方が実朝弑逆の陰謀をたくらんだ時に、義時は情け容赦もなくその意図を粉砕し、将軍家を守護する。そのことについて、〈私〉はそれが《少しも間違つた御態度ではなく、間違ひどころか、まことに御立派な、忠義一途の正しい御挙止のやうに見えながらも、なんだか、そこにいやな陰気の影があるやうな心地がいたしまして、正しさとは、そんなものでない、はつきり言へませぬが、本当の正しさとは似てゐながら、どこか全く違ふらしい、ひどく気味の悪いものがあるやうな気がする》と語る。〈私〉は実朝と義時の間に、何の対立もない主従の関係を見ながら、しかし、同時にその《忠義一途の正しい御挙止》の内にこそ、義時の陰気な策謀の臭いを嗅いでいる。実朝は北条氏および義時のそれを知らないわけではない。よく知りながら、知らぬ振りをして騙されているほかなかったのだ、というように。

実朝の明るさの正体とは、ここにあった。北条氏および執権義時の忠義として現われる暗さ、陰気な匂い、異常な正しさの放つ悪臭のなかに、権力の陰謀が渦巻いているとすれば、それに対比して語られる、この実朝の明るさの中身はがらんどうである。まさしくそれは空虚の中心だった。〈私〉は実朝の発することばを、すべて漢字混じりのカタカナで表現している。それは貴種が同時に白痴や嬰児であるような、詩のことばが同時に片言でしかないような異常さで、〈私〉の語りの文脈のなかに浮き出ている。《都ハ、アカルクテヨイ》《平家ハ、アカルイ》《アカルサハ、ホロビノ姿デアラウカ。人モ家モ、暗イウチハマダ滅亡セヌ》のであれば、実朝はその明るい空虚さによって、滅びる運命にあるのである。〈私〉は《将軍家の天衣無縫に近い御人柄》について、こんな風に語っている。

将軍家の御胸中はいつも初夏の青空の如く爽やかに晴れ渡り、人を憎むとか恨むとか、怒るとかいふ事はどんなものだか、全くご

存じないやうな御様子で、右は右、左は左と、無理なくお裁きになり、なんのこだはる所もなく皆を愛しなされて、しかも深く執着するといふわけでもなく水の流れるやうにさらさらと自然に御挙止なさつて居られたのでございます……

これは何とも紋切型の明るい空虚ではないか。わたしは太宰が戦争下において、こんな実朝を理想像として思い描いているとは、どうしても思えない。〈私〉は実朝への強い信のなかで語っているが、それを通して太宰が掴んでいるのは、対立する武家集団を皆殺しにする、百鬼夜行の場と化した鎌倉幕府のなかで、実朝が生きられる位相が、知らぬ振りをして義時に騙される明るい空虚、《無邪気な霊感》でしかない、という認識だろう。そして、実際的な政治権力を北条政子・義時の母子に握られているなかで、その明るい空虚が生き延びるためには、武家勢力の誰もが替わることのできない、源家としての貴種性において、朝廷との結びつきを強め、祭祀の統領として宗教的な権威を高め、都の雅びの象徴である和歌、管弦に秀でること以外にはなかった。

こうして〈私〉は将軍家が《京都の風をなつかしみ、またかしこくも、御朝廷の貴い御方々に対し奉っては、ひたすら、嬰児の如くしんからお慕ひなさつて居られ》る様子を映しだしている。〈私〉にとって、実朝のアカルサは都のアカルサの投影なのである。また、荒廃した寺社を修繕したり、神仏の化身とされる聖徳太子の御治蹟を調べ、その慈悲や霊感、崇仏の心につながろうとする《この世の人でないやうな》右大臣の姿を語っている。さらに十三、四歳頃から『新古今和歌集』に親しみ、自身も歌を作り始め、その後、『古今和歌集』や『万葉集』を手にする実朝を〈私〉は語っている。この和歌においてこそ、実朝は精神的に京都にまた朝廷に深く結びついているのであり、また、そこに敬神崇仏に生きる、祭祀の統領としての将軍家の姿も映しだされている。これはいわゆる〈史実〉に基づく評伝風の小説であって、詩人論ではないから、和歌があげられるだけで、注解に類する部分が少ないが、当然、〈私〉の実朝の和歌への見方は、そのなかに位置付けられている。

『右大臣実朝』のなかに引かれている和歌は十八首である。『吾妻鏡』のなかには、実朝が横死する前に詠んだ辞世の歌が一首あるが、この《禁忌の和歌》は、編纂者たちの創作という説を疑えない。従って、他の〈史実〉とは違って、歌の引用には影響を与えていない。とすれば、引用歌がどういう傾向を持っているかは、太宰の小説の性格を端的に映しているはずである。この点、和歌を論ずること自体が半ば目的の、小林秀雄の「実朝」とは、並列的な比較はできないが、それぞれがどんな歌を引いているかは、興味のあるところだ。まず、小林が引いているのは、先の疑わしい辞世の歌も含めて二十二首である。このうち引用が重なっていたのは七首に過ぎない。これは意外だった。実朝の和歌は、同時代の歌人の追随を許さない、ずば抜けた少数の秀作がある一方、習作や模倣歌、平凡な歌が多い。作歌が二十二歳までで終わっていることを考えれば当然だが、それで限られた秀作を引こうとすれば、普通は重なってしまことが多いのである。実際、両者が共に引いている七首は、いずれもよく知られた秀歌である。

まず、太宰の小説の性格と深く結びついて、その中に引かれているが、小林の鑑賞眼では問題にならない歌を出してみる。（小説のなかのカタカナ表記をそのまま使う。）

ハルサメノ露ノヤドリヲ吹ク風ニコボレテ匂フヤマブキノ花

ただ綺麗というだけの平凡な趣向の古今風の歌である。〈私〉は《天真爛漫とでも申しませうか。心に少しでも屈託があつたなら、こんな和歌などはとても作れるものではございませぬ。》と述べている。いわば実朝の内心のアカルサを象徴する歌として引かれているのだが、実際は模倣歌の幼さだけが際立っている。

しかし、このことは〈私〉にも自覚されていることで、当時、出家隠遁していた鴨の長明が鎌倉に下向し、将軍家から歌の感想を求められた時に述べた意見にそれは出ている。長明は《嘘をおよみにならぬやう》と言う。嘘とは真似事のことであり、特に《都の真似》をしないように忠言し、恋愛歌を例に次のように申し述べる。

雁によする恋、雲によする恋、または、衣によする恋、このやうな題はいまでは、もはや都の冗談に過ぎぬのでございまして、その洒落の手振りをただ形だけ真似てもつともらしくお作りになつては、とんだあづまの片田舎の、いや、……中略……あづまには、あづまの情がある筈でございます。

長明はこのように実朝の痛いところを突いて、その悪い歌の典型例として《ユヒソメテ馴レシタブサノ濃紫オモハズ今ニアサカリキトハ》をあげている。これは長い序詞を使って、女の髪の毛を束ねる濃紫の元結のイメージを浮き上がらせるが、たしかに技巧の勝った都風の歌である。実朝は不快感をあらわにする。しかし、長明の《その悪業深い体臭は、まことに強く、おそるべき力》をもっていて、この会見の後、実朝の歌が変っていった、と〈私〉は観察するのである。

その他、この小説の中で引かれ、小林が絶対に採らないと思われる歌の特徴の一つは、軽い戯れの歌である。

春雨ニウチソボチツツアシビキノヤマ路ユクラム山人ヤダレ

これについて〈私〉は、正月の二所詣での折り、《ひどい吹き降り》のなかの難儀の際に詠まれた《おたはむれのお歌》で、《お供の人たちを大笑ひさせ》た、と語っている。引用では省略されているが、この歌の『金槐和歌集』テキストでは、《二所へ詣でたりし下向に春雨いたく降れりしかばよめる》という前詞がある。それで見れば実朝が二所詣での途次に春雨にあって、こんな難儀な山路を濡れながら行く自分や供の者を、ふざけてあの山人は誰だろうと詠んだ、という解釈は成り立たないことはない。『万葉集』にこれとそっくりの類歌（本歌）があるが、実朝の歌の方がいい。

次にあげるもう一首の戯れ歌は、頼朝以来の忠臣で武勇に勝れた和田義盛とその一族が、北条家に反旗を翻し、大争乱となった、その一ヵ月ほど前の殺気のみなぎっていた頃の御所で詠まれた、という。

我宿のマセノハタテニハフ瓜ノナリモナラズモ二人ネマホシ

《マセノハタテ》はませ垣のはずれという意味だが、これなども習作の域を出ない、鴨の長明に言わせれば、嘘っぽい軽い歌の部類に入るだろう。《将軍家は何といふ理由も無く、女房等をお集めになつて華やかな御酒宴をひらかれ、之まで例のなかつたほどに、したたかにお酒を召され、女房等にもお気軽の御冗談を仰せになつて、》この歌を作り、一座を和やかに笑わせた、と言う。『吾妻鏡』には、この年、つまり、建歴三年四月七日、《女房等を聚めて御酒宴あり》の記事があるが、むろん、こんな歌も情景説明もない。すべて小説的な脚色である。実朝は暗い陰謀と裏切りの渦巻く幕府にあって、自分の身の回りだけに、明るい空虚を作っていた、それに相応しいのは、こんな嘘っぽい戯れ歌だ、というのが〈私〉の語りを通して太宰が見ているものだろう。

それは先の「春雨ニ」の歌の引用の仕方でも同じであった。建歴三年は正月一日より地震があり、和田氏一族の兵乱があり、御所の炎上、大地震、落雷など《鎌倉中がひつくり返るやうな騒ぎばかり》が続くのだが、それもあってか実朝は箱根権現、伊豆山権現への、いわゆる二所詣でを初めとして、その他の寺社への参詣を繰り返す。この小説では、その二所詣での時に詠んだとされているのが、次の二首である。そして、この二首は小林もひらがな表記で引いている。これは一般的にも名歌とされているものだろう。

タマクシゲ箱根ノ水海ケケレアレヤ二クニカケテ中ニタユタフ
箱根路ヲ我コエクレバ伊豆ノ海ヤ沖ノ小島ニ浪ノヨル見ユ

まず、「タマクシゲ」の歌の小林の理解は、奥歯にものが挟まったような物言いでよくわからない。実朝の歌を、その《天稟の開放》と捉えるのは、ワン・パターンだが、《言葉は、殆ど後からそれに追ひ縋る様に見える。その叫びは悲しいが、訴へるのでもなく求めるのでもない。感傷もなく、邪念も交へず透き通つてゐる。》とは、どういうことか。この後に続けられているモノローグも不可解である。この歌では東北方言で〈心〉を指す《けけれ》と、《二クニ（テキストでは〈二国〉》に触れられなければ、何も言ったことにならないのだが、小林はまったくそこに眼がゆかない。

では、太宰の小説の〈私〉はどうか。まず、箱根を出て、振り返ると《箱根の湖は樹間に小さくいぢらしげに碧水を湛へてゐるのが眼下に見え》たという情景説明があり、歌の引用のあと、次のような理解が示される。

心のことを東言葉でケケレと申す事もございまして、また二クニといふのは相模と伊豆の事かと存ぜられます。相模伊豆の国ざかひに、感じ易いものの姿で蒼くたゆたうてゐるさまが、毎度の事でございますが、不思議なくらゐそのまんま出てゐるやうに思はれます。……中略……人によつては、このお歌にこそ隠された意味がある、将軍家が京都か鎌倉か、朝廷か幕府かと

思ひまどつてゐる事を箱根ノミウミに事よせておよみになつたやうでもあり、あるひは例の下司無礼の推量から、御台所さまと、或る若い女人といづれにしようか、などとばからしい、いろいろな詮議をなさるお人もあつたやうでございましたが、…

解釈として新しいことが言われているわけではない。《二クニ》に京都か鎌倉かといった寓意を求めない点で、やはり、それを排した斎藤茂吉の説に近いが、ただ、これが徹底しているのは、茂吉ですら《堪えがたいやうな悲哀の情調》を見ているのに、そういうものを一切読み取らないところである。あるがままの情景のなかに、たださっぱりと歌をおいて見るという態度なのである。

次の「箱根路ヲ」の歌も、これと語りの文脈が連続していて、解釈らしいことばはないが、〈私〉が《まことに神品とは、かくの如きものと思ひます。あづまには、あづまの情がある筈でございますなどと、ぶしつけな事を申し上げたあの鴨の長明入道さまも、この名歌に対しては言葉もなくただ低頭なさるに違ひございませぬ。》と述べているところが注目される。なぜなら、対比的に言えば、《あづまの情》などというものに、まったく視野がゆかないところに、良くも悪くも小林秀雄の近代的な理解はあるからである。この歌も、小林は《大変悲しい歌》だとして、そこに《彼の孤独》を読み取り、《悲しい心には、歌は悲しい調べを伝へるのだらうか。それにしても、歌には歌の独立した姿といふものがある筈だ。この歌の姿は、明るくも、大きくも、強くもない。》と述べている。

しかし、何と言っても、小林の読解の特徴は、《沖の小島に波の寄る見ゆ》の叙景を、《芭蕉の所謂ほそみとまでは言はなくても、何かさういう感じの含みがあり、耳に聞えぬ白波の砕ける音を、遥かに眼で追ひ心に聞くと言ふ様な感じが現われてゐる様に思ふ。はつきりと澄んだ姿に、何とは知れぬ哀感がある。耳を病んだ音楽家は、こんな風な姿で音楽を聞くかも知れぬ。》というところまで深読みするところにある。近代人ではない実朝を、戦争下の自らの孤独な内面にまで拉致してくる、こういうモダンな鑑賞は間違いだと言ってもしょうがない。初めに触れたように、どう動いても破滅する、その運命づけられた実朝の孤独な詩魂という見方自体に、戦争下の小林自身の孤独で暗い内面が重ねられているからだ。ここには宿命観が漂っている。

いま読んで、それが窮屈なのは、あるがままの歴史の進行を見ようとする眼が、そこに感じられないからである。《実朝の横死は、歴史といふ巨人の見事な創作になつたどうにもならぬ悲劇である。》《彼は殺された。併し彼の詩魂は、自分は自殺したのだと言ふかも知れぬ。》《実朝の人物の姿や歌の形が、鮮やかに焼付けられるには、暗室は暗ければ暗い方がいゝ。》という小林の見方は、魅力的だが、閉じようとする力しか働いていない。小林は何から何を閉じようとするのか。それは実朝の運命づけられた生が、《どうにもならぬ悲劇》だとしても、彼は悲劇を生きている、生きようとした、ということに対してである。　それは天皇、朝廷への忠誠心を詠んだ実朝の和歌の扱い方にも見られる。まず、太宰の小説では、上皇より親書をもらった後に詠んだと思われる三首が引かれている。それらはまた、『金槐和歌集』の巻末に据えられているものでもある。

太上天皇御書下預時歌

オホキミノ勅ヲカシコミ千々ワクニ心ハワクトモ人ニイハメヤモ
ヒンガシノ国ニワガヲレバ朝日サスハコヤノ山ノカゲトナリニキ
山ハサケ海ハアセナム世ナリトモ君ニフタ心ワガアラメヤモ

小林の詩人論では、この内、最後の一首だけを引いて、そこに《何かしら永らへるのに不適当な無垢な魂の沈痛な調べ》を聞き、《彼の天稟》が《巨大な伝統の美しさに出会ひ、その上に眠つた事を信じよう。》と書いている。しかし、先にも茂吉の論文で触れたように、《二心》という観念が浮かぶこと自体がけしからん、というような論議が横行する時代である。天皇に《二心》、つまり、裏切りの心を抱くようなことは決してありませんというのは、単に《伝統の美しさに出会》うということとは違うのである。それに言及しなければ、この歌の本質には触れられない。小林の〈近代人〉実朝の《どうにもならぬ悲劇》からは、それが見えない。彼は見たくないのである。

それに比べ太宰の〈私〉はあっけらかんとしている。彼の実朝は〈近代人〉ではない。中世鎌倉幕府の陰惨な権力のゲーム、それが《山ハサケ海ハアセナム世》だが、そのなかで〈仙洞御所〉とつながることでしか、アイデンティティーを見いだすことができない実朝の悲劇を、眼にいっぱい広げるのである。文学は歴史ではないから、その彼の心情が時代錯誤かどうかは、二の次である。

〈私〉はその「天皇御書」が、何か実朝と朝廷との〈密約〉に触れているのではないか、という下司の勘繰りを一蹴して、次のように語っている。

大君への忠義の赤心に、理由はございません。将軍家に於いても、ただ二念なく大君の御鴻恩に感泣し、ひたすら忠義の赤誠を披瀝し奉らん純真無垢のお心から、このやうなお歌をお作りになつたので、なんの御他意も無かつたものと私どもには信ぜられるのでございます。

〈私〉はたった一枚の〈御親書〉によって、実朝を《百の霹靂に逢ひし時よりも強く震撼せしめ恐懼せしめ感泣せしめるお方の御威徳の高さ》は、《私ども虫けら》では推し量ることができない、と言う。そこであまりに《御皇室の洪大の御恩徳》が過大に誇張されるために、かえって滑稽感、不敬感が生まれるほどである。一方、実朝に比べて相州義時は《将軍家と根本から違って、胆力もあり手腕もあり押しも押されぬ大政治家でございましたのに、御自身御一家の利害のみを考へ、高潔の献身を知らぬお方》と蔑視される。こちらは朝廷など、いつも知らぬ顔である。

むろん、太宰もこの小説において、語り手〈私〉の立場で、主観的な脚色をしているだろう。唯一正当で客観的な歴史などというものはない。小林も太宰も依拠している史料の主要なものの一つ『吾妻鏡』も、北条氏の立場で編纂されている。しかし、太宰は小林のように実朝の《どうにもならぬ悲劇》を固定しない。宿命観で染め上げない。なぜならそれは常に〈私〉の手で、中世鎌倉の権力のゲー

ムのなかに置かれているからである。それを語る〈私〉は太宰ではないが、その偏向は、やはり、戦争下を生きねばならぬ太宰の戦略であり、同時に時代から強制されているものも、そこに映しだされているだろう。

また、太宰自身が、戦局の進行のなかで感じていたものと、〈私〉が和田義盛一族の兵乱が起った建歴三年以後、それを分水嶺のようにして下り坂を転げ落ちていくように受け取る感じ方にも、たぶん、対応があるだろう。その時、〈私〉は《何一つ実体はないのに》、《御ところには陽気な笑顔も起り、御酒宴、お花見、お歌会など絶える事なく行はれて居りましたが、どこやら奇妙な、おそろしいものの気配》を感じる。そして《その不透明な、いまはしい、不安な物の影が年一年と、色濃くなつてまゐりまして、健保五、六年あたりから、あの悲しい承久元年にかけては、もうその訳のわからぬ不安の影が鎌倉中に充満して不快な悪臭みたいなものさへ感ぜられ、これは何か起らずにはすまぬ、驚天動地の大不祥事が起る、ど御ところの人たちひとしく、口には言ひませぬけれども暗黙の裡にうなづき合つてゐたほど》だと語る。

これを先の《御皇室の洪大の御恩徳》を語る、〈私〉の口調と比べたらいい。その滑稽なほど鯱張った公式発言と、〈私〉ではなく太宰自身が〈大東亜戦争〉下に充満している、《不安な物の影》や《不快な悪臭》を語っているような切迫さと、その間に大きなリアリティーの差がある。そのどっちかに太宰にとっての戦争の意味があるのではなく、そのすべてを凝視し、描ききることにあったことは言うまでもない。それはともかく、実朝に対する忠義一徹の老武将で、将軍家も御贔屓の和田義盛とその一族が、北条家の覇権をめぐる策謀に破れて、鎌倉中をゆるがす大争乱の末に壊滅させられていく。その後、自分の短命を自覚した実朝が、風流な歌舞遊興に耽溺する姿を〈私〉は語る。政治的な執行権は、すべて義時に掌握され、実朝にはそんな遊興か、加持祈祷や寺社参りしかすることがなくなってしまったのである。また〈私〉は、実朝が大江広元や義時の諫言を排して、朝廷に次から次へと官位の昇進を求める姿を伝えている。それは朝廷に対する《幕府の威信を保つ上からも、面白くない事》で、それが実朝の位置を一層危うくする。

そんな時に起った不可解な出来事が、実朝の渡宋の計画である。当然、これも幕府の猛反対にあうのだが、鎌倉に乞食姿で現われた、宋人陳和卿に大唐船を造らせる。しかし、それは進水せず、この計画は挫折する。すべて『吾妻鏡』の〈史実〉にもとづいて脚色されているのだが、〈私〉の解釈は独自である。これに実朝を異様にせきたてたものは何か。それは陳和卿の卑しい心を見抜いた上で、彼を利用して、行き先はどこでもいい、《たつた一年でも半歳でも、ただこの鎌倉の土地から遁れてみたいといふところに》あった、というのである。『吾妻鏡』の健保三年十一月の記述に従っているのだが、実朝は自分の意に反して皆殺しにした、寵臣和田義盛以下の将卒の亡霊が、群れをなして枕上に立つ夢を見る。この小説では、あくまで《荒涼たる》内部を抱えて生きようとする、実朝の悲劇が描かれるのである。

しかし、それを断つのは、いうまでもなく前将軍頼家の次男公暁禅師である。父頼家を失脚させ、その幽居先の伊豆の修善寺で殺し

たのは、実際はともかく、名目の上では実朝と北条家だから、公暁は伯父の将軍と義時を刺殺する理由をもっていた。ただ、この小説での公暁の役割は、親の仇を討ち、自らが将軍に取って代ろうとする人物を、ただ演じるところにはない。彼のみすぼらしい野心や、それを利用しようとする幕府内の権力関係も、鶴岳八幡宮での暗殺の場面すらも描かれないのである。それは『吾妻鏡』などの史料を引いて、それらが語るにまかせている。

では、小説のなかでの公暁の役割はどこにあるか。それは天皇の威信を象徴する京都を否定し、それにつながることによって、絶対的に聖化され、信仰される実朝の神格の否定なのである。むろん、代わりに執権義時の威厳を肯定しているわけではないから、公暁の信ずるものはこの世に存在しない。〈私〉の語りの立場そのものを否定する公暁を、いわば抱き込んで〈私〉という語り手は成立しているのである。こういう公暁はどんな史料も語ってはいない。とすれば、ここには作家太宰の強烈な狙いがある、と見るべきだろう。公暁が辛うじて主役で登場するのは、最後の一章だけであるが、この小説において、前述した三角形の一角を占めるのは、この役割の重さによってである。

〈私〉の見る公暁は《卑しく含羞むやうな、めめしい笑顔》、《軽薄でたより無》い赤すぎる口元、《不潔なみだらなものさへ感ぜられる眼の光で特色づけられている。これは太宰が小説のなかで、好んで与える自画像にそっくりだ。〈私〉が鶴岳宮の僧院の公暁に会いに行くのは、将軍の勧めによるというのも暗示的である。二人は由比浦に出る。そこには《打ち捨てられたままになつてゐる唐船の巨大な姿のみ、不気味な魔物の影のやうに真黒くのつそりと聳え立つてゐる》が、それはこれから起る凶事の象徴のようなものだろう。そこで公暁は、唐船の下に集まってくる蟹をひきずり出すと、残忍な手つきで船板にたたきつけ、その甲羅の潰れた蟹を焼いて食べるのである。そして、《死なうかと思つてゐるんだ》、と言う。この小説において、生きる場所がないのは実朝だけではない。その対極にいる公暁もそうなのである。当然、公暁にとって、実朝暗殺は、己れの自殺をも意味する。ここでの聖と賤は対極として引き合っているが、同時に裏表だった。

彼は実朝が憧れる京都はいやなところ、見栄坊で嘘つき、口ばかり達者で、反省力も責任感もない、と貶す。また、あれほど慕っていながら、なぜ、実朝は京都へ行かないのかと問い、《将軍家といふ名ばかり立派だが、京の御所の御儀式の作法一つにもへどもどとまごつき、ずんぐりむつつりした田舎者、言葉は関東訛りと来てゐるし、それに叔父上は、あばたです、あばた将軍と、すぐに言はれる。》とこき下ろすだけではない。田舎の野暮な者ほど、《華奢で繊細なものにあこがれる》《あの人の御日常を拝見するに、ただ、都の人から笑はれまいための努力だけ、》《まあ、田舎公卿、とでもいふやうな猿に冠を着けさせた珍妙な姿のお公卿が出来上るだけだ。田舎者のくせに、都の人の身振りを真似るくらゐ浅間しく滑稽なものは無い》と、まさに言いたい放題を並べている。しかも、北条家の者たちが、実朝を《気違ひだの白痴だの》と言っていることまで紹介する。

〈私〉は蟹の残骸の《掃き溜めのやうな汚なさ》が、公暁の心の

姿だと付け加えているが、先の言いたい放題は、暗殺者の心理的な根拠とは何の関係もないことだ。小説の内部の力が、それは文学が生きるということだが、実朝のフイクションを見据える公暁のことばを、必要としているのである。そこにはいわば戦争下の小説という場で、もう一つの戦争をする太宰の不逞な眼がある。

註　記

1 鶴谷憲三「『右大臣実朝』―太宰治における〈実朝〉」（『国文学解釈と鑑賞』至文堂　一九八七・六）は、太宰が実朝への着手を可能にした基本資料として、これと雑誌『鶴岡』（国弊中社鶴岡八幡宮社務所、昭和十七年八月号）の二つをあげている。

2 『太宰治全集付録第八号』（八雲書店、一九四九・七・十五）

3 『斎藤茂吉全集』（岩波書店）第十九巻所収。

4 このことについては、「花なき薔薇―太宰治『惜別』と二つの戦争」（梅光女学院大学公開講座論集第四五集『太宰治を読む』）で論じている。

5 たとえば大久保典夫は《吉本隆明（『源実朝』）が、いみじくも指摘しているように、この物語は、イエス・キリストをユダの側から描いた『駈込み訴へ』（『中央公論』昭十五・二）とまったく重なるのだ。》（『国文学解釈と鑑賞』至文堂、一九八七・六）と書いている。

6 吉本隆明『源実朝』「1実朝的なもの」（筑摩書房）より。